

「コミュニケーションと集団作り」

共同研究者 日本福祉大学 非常勤講師 竹沢 清
助言者 和歌山県聴覚障害者協会 櫻井 貴浩
司会者 いこいの村・梅の木寮 施設長 記 由美
京都市聴覚言語障害センター 山崎 伸治

はじめに

参加者は共同研究者、助言者、司会、レポーター、通訳者、要員合せて36名でした。

レポートが例年にも増して多く、1日目に2本、2日目の午前に4本と合計6本の報告をしてもらいました。一般参加者の自己紹介や問題意識、支援で困っている事などは、すべて2日目の午後に報告してもらいました。

レポート報告の概要

(1)「どんぐりの仲間の集団生活から見える
変化と成長」

ふれあいの里 どんぐり
栗島 雄介

Aさんは30年もの間、精神病院で手話から離れた生活を送ってこられた。どんぐりという手話のあふれる環境で、自分が活躍できる仕事と集団に出会い、手話と自信を取り戻していく姿を報告されました。

Bさんは80歳になってどんぐりに来られた盲ろうの人で、手話も身振りも理解できない。安心して暮らしてもらうため「共通の言葉づくり」を進めてきた様子が報告されました。

困難な人生を歩んできたろう重複の仲間の人生を受け止め、人権を取り戻す「どんぐり」の実践が伝わる内容でした。

(2)「高齢難聴者のくらしの場を考える」
京都市聴覚言語障害センター
中井 真琴

Aさんは、人生の大半を聞こえる人の世界で過ごして来られました。現在入所中の若木寮を「ここはろうの人の施設やろ」と、違和感を口にされます。難聴であっても聞こえる人の介護施設へ入ることを希望するAさんに、支援者としてどのような支援が良いのか模索している様子が報告されました。

竹沢先生から「居心地の良い場はどこか」利用者の思い、支援者の思い、立ち止まり考えることも大事との助言がありました。

(3)「職員との信頼関係作り」

淡路ふくろうの郷
石黒 裕規

Yさんは認知症があり、女性入居者への暴言暴力や、排泄介助、おむつ交換などへの拒否がある。

毎日の言動を記録し、そこから傾向をつかみ、ご本人の尊厳や気持ちを大事に支援してきた結果、入居当時に比べ落ち着き、職員との信頼関係も築きつつあるとの報告でした。

しかしYさんの暴力性や女性へ厳しく接する様子は変わらないため、入居者と話したくても嫌がられユニット内で孤立。原因が自分であることを認識できず、また今後も変わらないであろうYさんと入居者の関係を改善したいと、報告されました。

竹沢先生はじめ施設職員の参加者から、認知症があっても、職員がその方の本当の願いを探り、尊重する支援をしては、など、入所施設で

の経験や助言がありました、既にふくろうで
取り組まれたとのことでした。

(4)「難聴者に手話の魅力を感じてもらうた
め

～音声に頼らない手話指導～

京都府聴覚言語障害センター

飯田亜希子

自立訓練事業の1つで難聴者向けの手話講
座を指導しているろう講師による報告でした。
この講座の目的は「手話の習得」でなく「手話
に限らずコミュニケーションの幅を広げるこ
と」「難聴の受容」ということでした。対象者
の多くは60～70歳代の中途失聴者で、音声
に頼らない手話の獲得を目指す講師の指導の
もと、表情が豊かになり、ろう者に積極的に話
しかける難聴者も出てきたなど、良い結果がみ
られる一方で、難聴者同士の会話は音声のみで、
手話への自信のなさからろう者へ話かけられ
ない人もいたとのこと。音声での会話が可能な
難聴者が多様なコミュニケーション手段を身
につける難しさに、楽しみながら学び続けられ
るようにと工夫されている取り組みでした。

(5)「私の日という取り組みを通じて」

障害者支援施設 なかまの里

辻井 寛之

『私の日』という特別な1日、利用者が担当
支援員を独占し一緒に過ごすことができる取
組みの報告でした。まず、利用者が支援員と
1日一緒に過ごしたいと思うことが素晴らし
いが、1年前から希望を聞き取り始めること
があると、準備期間の長さに驚きがありました。

施設ではわからない利用者の様子を見るこ
とで、支援の見直しのきっかけとなり、利用者
は自分の希望、計画を実行する体験ができ、お
互いに実りの多い取り組みでした。課題も出さ
れていましたが、参加者からは自分たちの施設
でも実践したいとの意見がありました。

(6)「楽しく集える居心地のいい環境作りを
目指して」

北摂聴覚障害者センターほくほく

島田 邦彦、西山 恵美子

「ほくほく」(就労継続B型)は、自分たち
の暮らす地域に、手話でおしゃべりができる場
所が欲しいという要望から設立された。利用者
の多くは65歳以上という高齢者で、通所する
楽しみ、居心地の良さを感じてもらえるよう
に休憩時間に喫茶を設けられています。

以前は職員が担当していたこの喫茶の取り
組みを、2人の利用者で担当することになり、
利用者の得意なこと、苦手なことを他の利用者
と助けあひながら、一人一人が自信を持ってで
きるようになっていく過程を報告されました。

報告されたろう職員の表情豊かな手話に、参
加者は釘付けとなり、喫茶の様子が目に浮かぶ
ようでした。

まとめ

レポート数が多く、報告中心で参加者と問題
意識を深める時間が取りにくい側面がありま
した。今回は、共同研究者の竹沢先生、助言者
の櫻井さんからの意見で補う形で進めまし
た。今後の集会では、レポートの数を調整する
等、工夫を期待したいと思います。

2日目の午後、参加者から職員集団のコミュ
ニケーションについて「聴者が2人いると手話
を使わない」と意見がありました。これは手話
の獲得ができていない新人職員の課題だけ
でなく、手話はできるが話す相手が聴者同士なら
音声による会話になり、そこにいるろう職員に
は会話がわからないという発言でした。

どこの事業所でも少なからずある課題でし
たが、ある参加者から「職員会議は声を出さず
に1時間ぐらい行っている」、また別の参加者
からは「架かってきた電話がろうの職員に関わ
る内容とわかれば、その時点で電話の内容を手
話で表し、ろう職員がその電話にすぐに対応で
きるようにしている」と、職場の情報共有化を
進めている報告がありました。

手話言語条例、障害者差別解消法、合理的配
慮など法整備や環境が整う中で、共に働く職員

間でのコミュニケーションに一定の壁があることは、この分科会が利用者支援に限らず、職員も含めた集団のコミュニケーションのあり方を議論し、より良いものにしていくことが求められていると感じました。